衣里の物語

根来 澪子

２０１９年１２月、長女衣里（エリ）は５５歳という人生の途上で天に召された。本人はもちろん、家族も私も不同意だったが、主の御意志は固く、あらがうことはできなかった。主に憐れみの心あらば、あれほどに生きたいと願った衣里の思いをお認めになってしかるべきなのに、主は衣里を見捨てられたのであろうか。その時から私の人生は悪夢に変わり、いつ果てるともない長い、暗いトンネルへと入っていった。時、あたかも凍り付く厳冬、垂れこめた暗い空から霙が降りしきる。

「悲嘆」とは、「喪失感」とは、「寂寥」とはと、あらゆるマイナーな感情の表現を全部まとめても足りないような絶望のどん底にいる。悲しみは津波のように押し寄せては繰り返す。子に先立たれる不孝は私だけではないのだと自分を慰めてみても、また「姿は見えなくてもいつも私のそばに寄り添っている」という宗教的な慰めに頼ってみても私を納得させることはできない。衣里は焼かれて灰になったのだ。肉体が存在しない以上精神は拡散し、すべては「無」であると思う反面、人間という成り立ちの不思議さを思うと、あるいは「魂」という、つかみどころのない概念も信じるに足るのではと自分に言い聞かせたりするが解決のつかない問題だ。「神は死んだ」というニーチェの思想は私の学生時代に流行したが、（これは信仰としての神であるらしい）予感、霊感、奇跡など超自然現象に全く縁のない私は体感的に信じる状況にない。こんなに会たがっているのに、衣里は夢にさえ出てこないのだ。が、自分を救済するものとして「存在する」と信じたほうが精神的に安定するのであれば、信心深い人たちに異論をはさむものではないし、もちろん神の存在を否定するほど傲慢ではない。

しかし、世界の歴史における宗教の悪影響を思うとき、絶対者の存在を疑問に思ったりもする。まだしも日本の八百万の神のほうが穏やかだ。せめて「信じるふり」をして懊悩を緩和させるべきか、これからの問題だが、それとは別に私は今、残り少ない人生を賭けて衣里を追悼しようと決心している。

私が今、震えるような思いで衣里に贖罪の気持ちを持つのには、彼女に母としてあまりにも投げやりでは

なかったかという猛省によるものである。子に先立たれた大抵の人が抱くという罪悪感に私も苛まれているのだ。

親戚も知人もない全くの未知の土地で私は長女衣里を出産した。そもそも妊娠3か月目、私の胎内にいるときから衣里は試練にさらされていた。新宿から私電で1時間２０分、「〇〇市」とは名ばかりの、５５年まえは駅周辺をのぞいて殺風景な農村地帯に夫と二人東京から移り住んだ。(現在は都心のベッドタウンとして発展しているが) それでも市内で評判がいいという産婦人科病院を探して受診した。結果は、妊娠3か月でもあるが卵巣嚢腫も患っているので胎児の成長の妨げになるといけないので、いますぐ手術をして腫瘍を取り除いたほうがいいだろうという診断だったので、その意見に従って開腹手術をうけた。ところが病巣は卵巣嚢腫ではなくて子宮筋腫であったという、現代ではあまり考えられないような誤診だった。結局、帝王切開で出産をし、同時に筋腫を取り除くことにするという医師の説明をうけ、そのまま何もせずに閉じた。さらに切開した傷跡が化膿するというアクシデントがあり (傷口から黴菌がはいったということ。これも今では考えられないミスだ) 傷の治療のために痛みをこらえながら通院した。胎児はたびたびの流産の危機に見舞われながらも3月末、２７００グラムの体重で無事この世に生を受けることができた。鳴き声も弱弱しく保育器にいれられ、私は術後の苦痛で母乳を与えることもできなかった。やっと自分の腕に抱いたのは生後一か月を過ぎてからである。「衣里」と命名された赤子は胎内にいるときから大きな不安におびやかされ、おどおどしながら生まれてきたのである。本能的な母性愛にあふれて抱きしめたという記憶もあまりない。それから私の育児が始まるのだが、指南書は当時話題になっていた『スポック博士の育児書』である。相談相手がいないから本に頼る以外になかった。

アメリカの小児科医ベンジャミン・スポックが１９４６年に発行したこの本は、世界的ベストセラーになって日本でも和訳され、『暮らしの手帳社』から出版された。私はその指示に従って忠実に実行した。内容は今でもはっきり覚えているが、たとえば、乳児の場合、母乳ではなく粉ミルクを3時間ごとに与える。おむつを取り替えるのも時間を図って行う。泣いても抱かないように、(抱き癖をつけてはいけないので)。夜中に目を覚ましても親の姿が傍にある必要はない。3歳になったら、親と寝室を別にして一人で寝かせる、など。

それらはすべて子供の自立を妨げないようにという配慮なのだ。現在の育児方法とあまりにも違うので（現在はスキンシップを大事にしていて、私も親子として当然のことだと思う）驚きだが、当時はそのように信じられていた。私は衣里が泣いても放置し（なぜ泣いているかを推測することもなく）時間をはかってミルクを与えるときと、おむつを替えるとき以外は抱くこともなくベビーベッドに寝かせっぱなしにしていた。抱いて愛情表現をすることは自立を妨げることとして自らに禁じた。

生後半年にも満たない乳児を寝かせたままで家を空け、駅前の喫茶店にいってコーヒーを飲んだりしていた。よく事故にならなかったと冷や汗をかくほどである。赤ん坊だった衣里にはもちろんそんな記憶はないだろう。ただ小学生になった何年かののち、幼児の時の想い出として、部屋のベッドに一人ぽっちで寝かされていた夜中に目が覚め、真っ暗な中で寂しくて、ママの傍に行きたいと思っても、叱られるから早く朝が来ないかなあと我慢して夜が明けるのを待っていたと言われたときドキッとした。衣里は３歳のころからすでに孤独だったのである。それでも反抗的になったり、内向的になったりすることもなく、アイドル歌手全盛だった当時、テレビから流れるいしだあゆみの「ブルーライト横浜」がお気に入りでよく「歩いても、小舟のように」と、舌足らずに歌っていたのを思い出す。陽気な子供でもあった。

次女が生れてからはますます衣里にたいする愛情表現は薄れていった。次女に関しては、育児に対する几帳面さも薄れていたので抱いたり負ぶったり、自然体であった。

衣里は新しく生まれた妹に対しても興味を示し、不思議なほどやさしく焼きもちを焼いたりすることもなかった。子供好きの夫が休日に衣里と遊んでくれた思い出が救いである。

二人の子供にとって私は「母親失格」であった。夫に対しても良き妻ではなかったと人生の最晩年になって忸怩たるものがある。私の思いは家庭以外の所にあった。

いつも抽象的な何かを求めていた。「毎日の生活の無意味な繰り返し」、「生きている人間の家庭という名の牢獄」はフランス、２０世紀の作家モーリヤックの小説「テレーズデスケルー」という作品の主題であるが、そしてこれは私の最も好きな小説であったのだが、丹沢おろしの風の音を聞きながら「家庭」に生きがいを

もてなかった若い母親の私の心は「平和な日常」に満たされず、空虚であった。太宰治は死の直前『人間失格』を書いて「恥の多い人生」を告白した。「家庭の幸福は諸悪の根源」という言葉もあるがこれは太宰独特のパラドックスであろう。私は、告白は苦手だからあえてしようとは思わないが、最晩年になった現在、自らの人生の来し方を否定せざるを得なくなって愕然としている。

やさしい夫や優秀な子供に恵まれ、客観的に申し分のない生活をしていた知人が、９０歳をむかえ、まもなく生が終わろうとしていたとき「私の人生は間違っていた、私は家庭を大事にするあまり、自分のやりたいことをすべて我慢し家族に尽くしてきた、私は本当に生きているという実感を持たずに一生を終えようとしている」と涙を流したことがあった。私はその時、人間というものの奥底に潜む悪魔を知った。人間はどんな生き方をしようと「後悔」する生き物なのだ。「悔いのない人生を」などというが、それはあり得ない。『あれかこれか』の哲学書でキルケゴールが、「結婚してもしなくてもどちらでも後悔するだろう、それならしてみてもいいのでは」と言っていることを引用して三島由紀夫は結婚に踏み切ったと何かのエッセイで読んだ。人並みに結婚をして二人の娘の母となった私は、今主婦としてあまりにも不器用で不真面目だったことを心底から悔いている。

小学生のころの衣里は人見知りが激しく、3月末生まれということもあって、引っ込み思案で体育の成績の評価は「2」、他の科目もパッとしなかった。次女の育児にかまけていたので親の私にもほとんど記憶にないほどの、全く目立たない平凡な子供であった。ただ5歳で始めたピアノが気に入って、武蔵野音大卒の先生に指導してもらっていたのだが、小学校6年のとき、「武蔵野会」の音楽祭に選ばれ、大きな舞台でショパンの「幻想即興曲」を弾きこなし、それが大きな自信になっていったのだと思う。中学にはいってめきめき成績が向上し、高校に入学してから音大受験を勧められたが、衣里は高校時代にお世話になった家庭教師の先生から影響をうけ、英語に興味を示して、大学の英文科を卒業した。「井の中の蛙になってはだめよ、世界は広いのよ」と、大学受験の時に話したとき、目を輝かせていたのをはっきりと覚えている。このころから関心は海の彼方に向かっていくのである。第一志望の航空関係の就職には失敗したが、当時バブルの真っ最中で大手の金融関係の職につき、株などを操作してリ

ッチなＯＬ生活を満喫してブランド品に凝るなど生活が派手になっていった。３０歳を過ぎるまで何度か転職をしたが、親の支援は一切なく、すべて自分の力でこなした。見事な自立ぶりであった。それは次女の奈見も同じである。

パラサイトとか、８０歳の親が５０歳の子供の世話をするとか問題になっているが我が家はそれぞれが見事に独立していった。友人に言わせれば「あなたが面倒をみないから子供は親を見限って家をでていくのよ」と言ったが、本当にそう思う。それぞれが自分の生き方に没頭するには望ましい親子関係で、私は育児に関してほとんど苦労をしたことがなかった。自由放任主義といえば聞こえはいが、親の介入がないという点で、あるいは子供たちにとっても都合のいい母だったのかもしれない。少なくても密着型の親子関係ではなくそれぞれ自分の生き方に没頭していた。いま、それを後悔する私がいて、逆風をうけているのである。

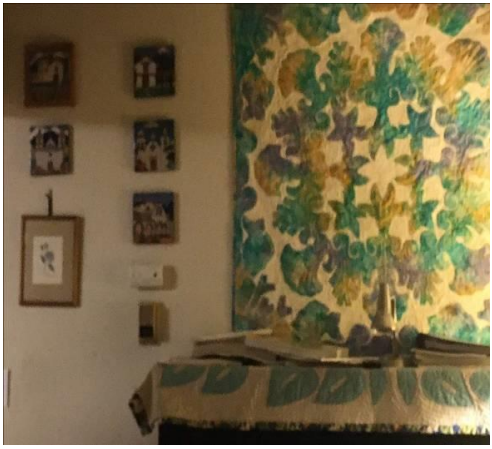
衣里は３０歳をすぎて、イギリス国籍の男性、ステイーブ・ロスと結婚をして、日本のレストランで披露宴をし、１９９９年、彼のアメリカ転勤に伴って渡米し、カリフォルニアのサンフランシスコ近くのサンノゼに住んだ。そのことは私が今までのエッセイで何度か書いている。

アメリカの西海岸は気候温暖、冬暖かく、夏は涼しいという恵まれた土地である。サンフランシスコは風光明媚、良き時代の風物もあちこちに見られ、ゴールデンゲートブリッジはことに有名で、ナパバレー、ソノマバレーなどのワイナリーはまさに観光地である。私は日本の寒い冬を避けて、１、２月は月単位で何度も渡米してアメリカの日常生活を経験した。ジャパンタウンがあって日本食が色々楽しめる。坂の多い街にはケーブルカーも走っていて、グルメにも、もってこいの街である。世界遺産「ヨセミテ国立公園」もある。

しかし、アメリカは高齢者には全く不向きな国だと

思っている。車の運転は必須だし、医療費の高額なのは致命的だ。何もかも広く、スーパーでも店内を歩き回るのはかなりの労力がいる。アメリカは「アメリカンドリーム」にあこがれる若者の住む国である。サンフランシスコにあるチャイナタウンでは、ベンチで日向ぼっこをする日本人らしき老人が見られたが、異国で年老いた人の持つ哀愁が、そこはかとなく漂っていて、改めて私は老後を暮らすのは日本で、と痛感したものである。

衣里がアメリカという土地で二人の子供を産み、どのようにして馴染んでいったのか、やはり人並み以上の努力をしたのだと思う。英会話に不自由はなかったとはいえ、文化の違う国で子供を育てていくのは、諸々の気遣いがあったと思う。国際結婚の失敗の珍しくない時代だった。全く違う環境で育ったイギリス人の、グラスゴー（スコットランド）出身の夫と、心底からの理解と愛情を築くのには時間を要したと思う。それをクリア出来たのはお互いの心の大きさだろうと思うのである。スティーブはのんびり屋で小さなことにこだわらず、本当に好感のもてる人である。衣里も、いつも相手の気持ちを尊重する大らかな優しい性格であった。



アメリカの小学校に見学に入ったり、ピアノのお稽古についていったり、衣里の友人たちのティーパーティに参加したりと、新鮮な経験をして、私もそれなりにアメリカでの楽しい日々を過ごすことができた。衣里は日本にいるときから興味をもっていたハワイアンキルトに熱中して地元の同好のグループにも所属して部屋を飾った。ほとんどがタペストリーである。

順調に十数年が過ぎたとき、衣里の身体に変調が起きたのである。

7年半前の7、8月、衣里は二人の孫を連れて帰国した。孫たちの長い夏休みを利用して日本を満喫するためである。当時私は変形性股関節症を患っていた。

衣里の滞在を利用してその間に手術をすることにして、衣里に入院のための手伝いをしてもらった。２５日間の入院であったが、衣里はよく私の面倒をみてくれた。毎日のように病院に顔を出して私が困っていることはないかを確かめ、何事も面倒がらずに世話をしてくれた。せっかくの日本滞在を私のために浪費させたことを申し訳なく思っていた。

その後、彼女たちがアメリカに帰って４か月後の２０１２年１２月の夕暮れ、私は日展を見に出かけ、漆絵を出品している知人を囲んで食事をし、満ち足りた気分で帰宅した時であった。突然衣里から電話があり、腹水がたまって医者に診てもらったら、卵巣がんのステージ４という診断を受けたという衝撃的な知らせだった。全く想像さえしていない「寝耳に水」の事態であった。卵巣がんは「サイレントキラー」といわれ、初期には症状がなく、末期になって初めて気づくという。腹膜播種などがあり現在では手術できないほど病巣はひろがっているという。その時の驚愕を私は『カリフォルニアの空』という題でエッセイに書いた。すぐに私と次女奈見はアメリカに飛んだ。孫のビビアンは中学１年、アンジェラはまだ小学生である。二人のためにも衣里は生きなくてはならない。

衣里のこれからの治療は、とりあえず抗がん剤でガンを縮小させ、それから手術をするということであった。衣里は抗がん剤の副作用でぐったりしていたが私たちの来訪をとても喜んでくれた。仕事を持つ奈見は４、５日の滞在で帰国したが、私は２週間ほど衣里と一緒に暮らした。その２週間が、私が衣里と過ごした最後の日々となってしまった。抗がん剤の副作用のない時、衣里と私はよく近郊を散歩した。サンノゼは日本人の多い街である。中心地には紀伊国屋書店があり、日本人の店員が日本語で對應してくれるし、日本人の経営しているリンガーハットなどもあり、和食を楽しむことができた。郊外のなだらかな丘陵にはのんびりと牛が歩いていて、近所にはエスニックな喫茶店やこじんまりした教会があったりして、ゆったりと散歩をたのしむことができた。貴重な日々だったがもう再び繰り返されることはなく、思い出のなかにとじこめられてしまった。

手術を控え、イギリスのスティーブのママが私と交代に来てくれることになり、私は２週間の滞在を終えて、日本に帰国した。サンフランシスコ空港までスティーブが送ってくれたが、衣里は自宅のガレージにたって私にバイバイをした。お互いに笑顔であったが、

これが肉眼で会う衣里との最後ではないかと機内で私は溢れる涙を抑えることができなかった。

抗がん剤でガンを縮小させて、衣里は3月に無事手術をし、その後、術後の抗がん剤がつづき、すべての治療を終えるのに半年かかった。半年後、衣里は溶解期を迎える。2年間、衣里の癌は奥深く体内に潜んでいた。治癒に成功したかと思えるほどに安定期にはいった。それから衣里の癌との闘いがはじまった。まず、すべての癌患者がそうするように食事療法に取り組む。グルメで、レストラン大好き、料理大好きの衣里はその後ベジタリアンになってほとんどの肉食を絶ち、家族と食事を別にして、有機野菜に玄米、海産物など、「ガンを食事療法で治す方法」という何冊かの本に頼って実行した。

それは気の毒なほどで、スカイプで話すとき、私はいつも「そんなにこだわらなくても」と慰めたものである。考えてみればスカイプの話題はいつも食に関することが多く、病状についての深刻な話題はさけていたような気がする。食事療法で末期がんが消えたというニュースに一喜一憂した。未来に希望を持ってもいいのではという期待さえもった。

その時期に、子供たちだけで夏休みを利用してイギリスの祖父母のところに遊びに行くことになり、衣里は日本に帰国の予定だったのを、フライトの時間が長すぎるということで、結局2週間ほど、スティーブと2人でハワイに行っている。ハワイはアメリカ領でいくつかの島があるが、衣里はほとんどの島をめぐるほどハワイが大好きだったようで、スティーブと衣里とが、濃密な時間を過ごせた思い出深い貴重な日々だったのだとおもう。

また同じころ、次女の奈見も渡米して一週間ほど衣里の所に滞在して西海岸を観光させてもらっている。衣里は一見元気そうで、奈見が退屈しないようにと毎日外出してアメリカの生活をたのしませてくれたという。奈見にとってもかけがえのない思い出となったことだろう。

衣里は2年半後に再発した。卵巣がんの再発は予後不良であるとネットにしっかり書いてある。新薬も衣里には功を成さなかった。最初は効き目のあった抗がん剤も組み合わせ可能な限り試みたが、次第に効果が薄れていった。衣里の病状は次第に下降していった。アメリカの病院は、検査の結果はその日のうちにメールか、電話でしらせてくるという。日本のように一週後に来なさいというのんびりしたものではなくチームを組んだ医療関係者が即座に治療方針を話し合い、医者と患者の関係はとても密で対応が早く、信頼しているのだと言っていた。

治らない病人に接するくらい悲しいことはない。亡くなる3、4年まえから週に一度、スカイプで、1時間ほど衣里と直接パソコンで話し合っていたが、刻々と衰弱していくのを目の当たりにする辛さは、真綿で首を絞められるようなおもいであった。

それでも衣里はあまり動揺するような様子はなく、弱音も吐かず、何時も前向きに、明るく、すこしでも希望を持ち続けられるように、ネットで日本の調理器具（例えばぬか漬けの樽、精巧な魚焼き網、銅製の薬缶など）を買い求めては使いこなすことで少しでも明日につなげようとしていた。昨年4月、私の誕生日のカードにも「近いうちに帰るのを楽しみにしています」とある。日本にある銀行口座も、わずかばかりの株券も整理せずにそのままであった。のちに奈見が後の整理に奔走することになるのだが。

その合間にもアメリカの友人たちとランチを楽しんだり、簡単なパーティをやったり、ショッピングや音楽を聴きに行ったりと普通に生活を楽しんでいたようである。亡くなって、改めて病状が深刻なものだったと知り、ショックを受けたと、親しい友人が葬儀の時に奈見に話してくれたそうである。

背中の痛みから始まって、徐々に全身に広がっていく事態にも自暴自棄にならず、あきらめず、抗がん剤治療や放射線治療に耐えた、末期がんと診断されてから7年間、これだけの病状に耐えるには強い精神力が必要である。衣里は感心するほど平静で、図太い神経で病気に立ち向かったと本当に驚くばかりである。それは私との対話だけでなく家族や友人に対しても同じだったと聞いている。私は祈る以外に何もできなかったが、重病人をかかえた衣里の家族の負担は計り知れないものがあっただろう。ビビアンとアンジェラの不安、スティーブの絶望は想像するだけで切ない。私は衣里を生み、成人まで育てた母親であるが、その後の

衣里には、成熟した女性としての生活があり、自分の力で愛する家庭を築き、スティーブの妻となり二人の子供の母でもあったのだ。むしろそちらのほうが衣里の人生にとって本番であっただろう。高齢で他国に住む私にできることは祈ることしかないと嘆いても、衣里は私に心配を賭けまいとする配慮はあっても期待などしていなかったのだ。

２０１９年。秋ごろになると、衣里の表情に影がさすようになった。私はもう衣里が年を越すことはできないだろうという恐怖をもった。それでも１２月初めにはスカイプで１時間ほどおしゃべりをした。内容は他愛のないもので、何時ものように食材の話題だったように思う。白いパンは体に悪いから、雑穀パンを食べるように、それは〇〇のメーカーにするべきだというのが最後の話題であった。少なくても深刻さはなかった。私も、いつもそうであったようにさりげなく世間話などをした。その日は日曜日で次女の奈見も私の後に一時間ほど、東京からスカイプで話している。二時間もおしゃべりするほどの体力があったのだ。「それじゃまたこの次の土曜日にね」とスカイプの予約をして「バイバイ」と手を振った。

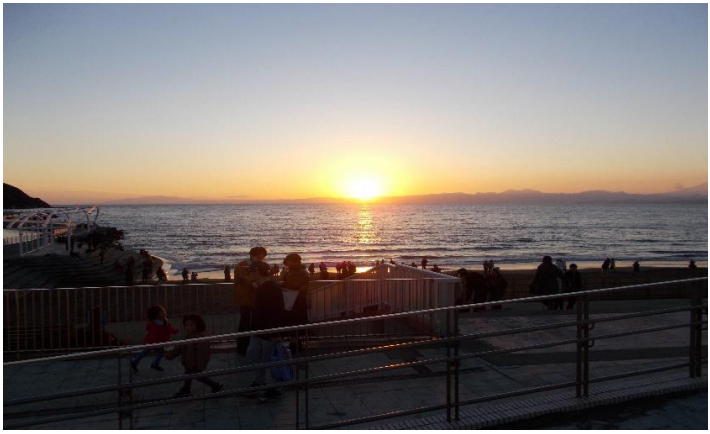
その３日後、１２月４日の早朝の電話で衣里の訃報を知らされた。衣里のいないロス家の家族３人とスカイプをし、直接、スティーブから衣里の死を伝えられた。東京在住の次女の奈見が即座に飛行機の手配をしてアメリカに向かった。そのことはエッセイ「永訣」に書いたとおりである。奈見は、葬儀に集まったアメリカの友人たちに会い、衣里は夫と子供たちに恵まれ、充実した日々をすごしていた、ほんとうに幸せな人生だったとのだと知らされ、改めて衣里の実生活に誇りをもったと話してくれた。

衣里の、病院におけるラストデイの２２時間の詳細を、スティーブが記録してコピーしたものを奈見が預かってきた。３ページにわたる英文を私は何十年ぶりかで英和辞典を引っ張り出し翻訳した。医事用語がおおくて理解できない部分もあったが、大体の様子が推察できた。要約すれば以下の通りである。

「衣里は１２月２日、朝１０時、何時ものように抗がん剤投与を受けるため、フリーモントにあるカイザーパーマネントホスピタルにいった。治療を受けている最中に突然結腸から出血し、血圧が低下した。看護師があわてて救急室に運んで処置をした。いったん症状は収まり、一般病棟に移り、電話でアンジェラにク

リスマスプレゼントの指示をしている。夕食はチキンをたべた。経過観察のため、2，3日入院することになり、スティーブも夕食をとるため帰宅するが、再び病院から呼び戻され、一般病棟から、オールナイトで観察する集中治療室に移ることを伝えられる。衣里は穏やかな表情で眠っていた。スティーブはそれを確認し、11時半に帰宅するが、真夜中の3時半に病院からの電話でよびだされる。駆けつけると衣里は人工呼吸器が必要となり、再びの出血で14パックの輸血をし、様々な治療を試みた。スティーブが病院についたときには意識があり、スティーブを認めることができた。しかし衣里の血圧は次第に低くなり、5時、人工呼吸器が挿入された。危篤状態になって、アンジェラを病院に呼ぶ。6時、アンジェラが病院に到着した時にはもう意識はなかった。ドクターは超音波で心臓を観察したが、心音が低下し、次第に脈拍がうすれ、12月3日（現地時間）朝8時23分、衣里は永遠の眠りについた。8時40分、サンタローザの大学にいるビビアンに連絡をとる」

直前まで正常に話ができた衣里は、わずか数時間の間に容態が激変し、天に召された。　どの時点で衣里は自分の死を自覚したのであろうか。葬儀に参列した奈見が、お通夜で対面した時の写真を持ち帰ったが、棺に横たわった衣里はスティーブの言葉を借りれば「ピースフル」であったという。痛みから解放されたからであろうか。



しかし私には「もっと生きたい！」と叫んでいるように思えた。衣里はスカイプではっきりと言っていた。

「今までは子育てに追われて自分のやりたいことができなかった、これから私の人生が始まるというのに、いま、死ぬわけにいかない」。ピアノやフルート、サキソフォン、ギターなど、様々な楽器の趣味をもち、理

系の大学に進む二人の子供の将来への期待、スティーブとの穏やかな日々の楽しみを思うとき、死ぬわけにはいかなかったのだ。「そうよ、本当にそのとおりよ、頑張ってね」としか言えなかった。

衣里は日常のささやかな生活の細部に楽しみを見出す術を身に着けていた。そのことを思うと私は「救ってあげたかった！」と、心を切り刻まれるような痛みを覚える。衣里は最後まで死を受容せず、明日があることを信じようとして抗がん剤治療を受けに病院に行き、そこで予知しなかった最後を迎えるのである。

衣里の棺の枕元には3個のモンチッチ（ぬいぐるみ）が並んでおかれていた。

モンチッチは、胴はぬいぐるみ、顔と手足はソフトビニールで作られ、柔らかくくたくたしている。１９７４年に日本で発売され、社会的にヒット商品になり、１９８０年代には世界的な人気キャラクターになった。衣里は５５歳という年齢でなお、モンチッチを愛玩していたのだ。幼児がぬいぐるみを大事にするのはよくあることでむしろ成長の過程で好ましいことだという。そのために多くのぬいぐるみが存在するのだが、衣里は家族でピクニックに行くときなど、必ず3個のモンチッチを持参したそうだ。家でもキッチンのテーブルの隅に並べて食事のまねごとをさせていたという。大学生と高校生の二人の母となった今も。

このことも私にとって衝撃であった。幼児の時の、私の愛情不足が５５歳の衣里をしてこのような表現をさせたではと深く思い悩んでしまう。衣里は幼い時から犬や猫、そして狸のぬいぐるみが大好きで外出する時もいつも持参していた。その幼児体験から抜け切れず、５５歳となった衣里が無意識にぬいぐるみをかわいがるようになっていたのだろうか。

スティーブは、衣里は死の床にあって3個のモンチッチに囲まれてハッピーだったと書いている。私はいまさら悔やみきれない贖罪の気持ちをどのようにして衣里に詫びたらいいのか。もはやこの世に存在しない衣里に詫びる方法はこれからの生涯をかけて追悼することしか思い当たらない。キリスト教式に言えば、私は重い十字架を背負ったことになる。

１２月末、年賀状を交換している友人に衣里の訃報を知らせたら、見事な生花を送ってくださる方たちがいて、サイドボードに遺影と遺灰を安置して祭壇を作り、その周りを華やかに飾った。衣里がアメリカに移住してからも、帰国するたびに衣里と交友のあったピアノ教師の知人のＨさんから白薔薇の花束と一緒に次のような手紙を頂いた。引用させていただく。

「（略）優秀な人はどこにもいます。衣里ちゃんはただの優秀な人ではなかった、それを、決して人に見せない、本物の謙虚さというものを身につけていた、そしてどんな間の抜けた人も心から受け入れ、認めることのできる包容力と豊かさ、上品さ、常に自分より他を優先して、出来ることをさりげなくやれる、人としての大きさ、人としてのレベルの高さを常々感じていました。何よりすばらしいのはそれが自然体だったことに感銘を受けていました。あのような人を見かけることは少ないです（略）衣里ちゃん、本当にありがとう」。

この手紙は衣里にとってなによりのご褒美である。このように思って下さる知人がいることは私にとっても本当にうれしく、感謝の気持ち一杯で、この手紙は、衣里に与えられた最高の贈り物だとおもう。

最悪の年、２０１９年（令和元年）が明け、２０２０年元日、スティーブ一家とスカイプをした。ビビアンもアンジェラも日本語が上手でこのままなら日本にきても日常会話には困らないだろうと思うほどであった。「でもママはいつも下手だと言っていたの」としょんぼりしている。「そんなことはない、とてもとても上手よ」とほめたら、二人とも嬉しそうにはにかんだ。「ママはもうここにはいないけど、いつも見守ってくれていると思っているから心配しないで」と、次女の甘えん坊のアンジェラが言ってくれた。衣里の遺髪は、日本の友人が送ってくれた梅の花模様の和紙に包まれ、

スティーブのベッドの枕元に置いてあるという。そう、衣里はいつも家族のそばで見守っている。いつも、いつも。信じると言いうことは理屈を超越している。名を呼べば、私のそばにも来てくれて「何か用？」と笑ってくれるような幻覚にとらわれる。

衣里は天に召された。永久に５５歳のままで年を取らない人になり、５５年の歳月を慌ただしく駆け抜けた私の「衣里の物語」は終わった。努力ではどうにもならない不条理な「運命」がこの世にあるということも知った。アメリカに２１年暮らし、そこには私の知らない「衣里の物語」があるだろう。いずれ、ロス家の人たちに会い、いろいろな話題で新しい「衣里」を発見できると思う。それまで元気でいたいと切に願っている。簡単に会えない距離があったが、チョコレートやナッツなど、私が喜びそうなアンティークな雑貨をこまめに送ってくれていた衣里は母親にたいしても、気遣いをもって接してくれた本当に優しい娘であった。幼児からの想い出は走馬灯のように駆け巡る。美しい風景に接した時、おいしいものを食べたとき、楽しいショッピングをしたとき、そして真っ青な空に夕陽が沈むのを見たとき、そのような平凡な日常のなかにあって、必ず衣里の笑顔を感じるだろう。

「あなたは今どこに」、と。

私は８０代後半にさしかかって、子を失うという人生最大、最悪の精神的危機を経験した。ヨーロッパ人を父に持つ二人の孫、ビビアンとアンジェラにたいして日本の祖母から、何らかの役にたつこと、それが、衣里が喜んでくれる唯一のことではないかと思っている。そう遠くない日、私が衣里と同じ世界に行く日まで、事あるごとに、何度でも繰り返す、衣里の想い出から解放されることはないだろう。それも、考えてみれば耐えられないほど長い時間では無い。

３月２１日、ロス一家とスカイプで話す。アメリカもコロナの流行で不要不急の外出は控えるようにとのことで、大学生のビビアンも自宅待機で、スカイプで授業をうけているという。３人とも笑顔で応対してくれた。まだママがいないことに慣れていなくて寂しいと沈んでいたが日本語を忘れないためにも時々スカイプをしてねとうれしいことを言ってくれた。いろいろな事が落ち着いたらぜひ日本に行きたいとのこと、も

ちろん大歓迎でそれは私の生きる希望でもある。確実にそこには衣里の血を繋いだものが存在する。二人の中に衣里は生き続けている。

（２０２０年２月）